

Title	戦前の女子入学と大阪大学 : 中野富子氏に聞く
Author(s)	中野, 富子; 大西, 愛
Citation	大阪大学史紀要. 3 P.70-P.76
Issue Date	1983-11-30
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/6089
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

戦前の女子入学と大阪大学

中野富子氏に聞く

聞き手 大西愛

△中野富子氏略歴▽

昭和三年 静岡女子師範卒業

昭和三年 静岡市尋常高等小学校勤務（一カ月で休職）

昭和三年 第三臨時教員養成所（奈良女子高等師範学校付設）数学科入学

昭和六年 同右卒業

昭和六年 同右卒業

昭和六年 福島女子師範学校勤務（昭和九年十月まで）

昭和十年 大阪帝国大学理学部数学科入学

昭和十四年 同右卒業

一 女子の大学入学について

— 阪大を受験なさったころの女子の入学はどうでしたか。

東北帝大はかなり前から女子を入れていたのです。私が静岡女子師範在学中、国語を教えていただいた山田ひさ江（東京女高師出身）という方が学校をやめて東北（帝大）に入学されました。大正の終頃です。その頃から漠然と進学することを考えていたように思います。昭和六年私が奈良を卒業する時、臨教の学生を学校では就職の面倒はみてくれ

ませんでした。教師をやる義務はあるけど権利はないのだということでした。それで前年広島文理大に入学された根本ユキさんを頼って受験のために広島へ行きました。

ところが私が静岡女子師範在学中校長だった方が、その時は福島女子師範の校長をやっていたらっしゃって奈良女高師宛に「ナカノイルカ」との電報で、父も学資を出してやれないから就職するようにとのことで文理大入試はあきらめて福島女子師範教師をつとめて学資をつくり、三年半後秋ごろから受験準備のために奈良におりました。

その頃奈良女高師にいらっしゃり（後にNHKに移られた西本三十二先生から阪大も二次募集をするらしいとのお話をきき、広島文理大を卒業して母校の先生をしていらっしゃった根本ユキさんが阪大の数学談話会に出席され清水辰次郎氏に確めて下さったので阪大も受ける気になりました。福島にいた関係もあって東北も受けるつもりでしたので両方を受験したのです。

仙台で受験し折り返し大阪を受験しました。あとで聞いたのですが、たまたまちょうど林鶴一先生の助手をやっていた女の人が研究室の人と結婚するという「問題」をおこしたのです。今なら何ということもないのですが、それが林先生の逆鱗にふれて、それ以来数学科では女子は入れないという内規ができていたのだそうです。それを知らないで受験し落ちてしまっただけで阪大で受け入れていただいたので大阪に来ました。

— 当時の女子の入学資格はきまっていたのですか？

帝大は旧制高等学校卒業生以外は受験資格はなかったのです。した

がって女子にはありません。ただ学生が少なかつた時二次募集することがあった。中等教員免許を持つ者が受けることができたのです。高師とか物理学校とか検定試験合格者とか。その頃新設された東京高師と広島高師に併設された文理科大は高師、女高師からはすんなり入学できました。

それで私がうけるときは阪大も二次募集をしたのです。あとからよその人に聞いた話だけでもね、そのとき阪大理学部部長は真島利行さんで仙台（東北帝大）から阪大にこられたので、奥さんも女子を入れるという意向をもっておられたことも反映して、女子も入れてもいいということになったというようなことです。これはほんとかどうかわかりませんが。

大阪毎日 4月25日

初めての大女大生

見事パスした廿六の娘さん

当分和服で 明朗風景



中野子明さん

大阪毎日 4月25日

このインタビューに応じたのは、私がインタビューしたとき、大阪毎日新聞に載った記事を見ても、私には何のこたもありません。写真も大学の方で、入学手続きの書類に貼ったものです。

二 阪大での生活

— 入学されると女子では初めての学生であり、またたった一人という事で女子の設備はなかったんですね。ご不自由なことはなかったですか。

全体の人数が少ないでしょう。こっちは年とってますでしょう。学生は若いですし、先生方の人数の方が多いくらいですよ。

— 写真などで拝見しますと、先生方もずいぶん若いんですね。

創設したばかりの大学っていいものですよ。カスがたまっていないて。

— それに理学部は錚々たる先生方がそろっておられましたね。

はじめはなんということなくすごしてましたけれど、だんだんいろいろがわかってきました。数学教室の奥に談話室というのがあって先生方がお茶などのむ部屋みたいなものがあつたんですが、そこでよく議論をたたかわせたりなされるのですよ。ちゃんと黒板もあって。抜身をひっさげて居るからこわいと学生は言っていました。学外からも数学談話会というので見えていたようです。

— 中野さんはじめから数学科ですか。

それはそうですが、静岡女子師範、それから第三臨時教員養成所、これは文部省がどの科目の先生がたりないということがおこるとその科目（数学科）だけを一クラスとる、だいたい高等師範に附属していたようですね。奈良が第三、つまり奈良女高師（今の奈良女子大）へいきました。静岡の女子師範（今の静大の前身ですが）のときは、小学校教員養

成所ですから全学科をやるんです。とくにそのころ数学に興味あるというほどでもなかったですね。

ちょうどそのころ京都の物理を出て、研究室に残っていてその後静岡女子師範にいらっしやった先生から、数学をやらないかとすすめられたんです。子供の時から数学は得意ではありません。でもほんとは絵の方が好きだったので、女師は卒業後に教師をやる義務年限があって高等師範系にしか進学できなかったのです。それで静岡尋常高等小学校という城内にあって静岡では有名な小学校の校長先生が師範の卒業式に先生をさがしに来て、私が答辞を読んだりしたから目立ったのでしょう、名ざしで採ったんだそうですが、それが四月に赴任して、一カ月にもならない時に奈良在学中の静岡女師出身の先輩から臨教数学科の募集があるという知らせを受けともかく受験してみるつもりで奈良へ試験を受けに行った。すぐ発表でしたから入ってしまった。あとからこの校長におやじがおこられたそうです。おこられるのはあたりまえで、こっちはまだ職業人としての意識が薄いですからね。

奈良は全寮制でした。何となくきゆうくつな学校ですよ、昔の高等師範というものは。つまりいい教師を育てて立派な女の人をつくらなければいけませんから、学校としては仕方のないことだったんです。小さいへや(四、五人が一つのへき)が三へや位ずつ一舎、二舎、三舎とわかれています。食事も当番でつくっていったんです。そんな中できゆうくつな思いをしていましたから、(阪大へ入って)かえって解放されて大変快適でした。男子の学校でもあるし、いままの大学とちがって人数は少ないし。大阪のときは部屋を借りて自炊して

いました。そのころは教練がありました。その掲示―場所や日時をかけた―が出るのですが「ただし女子学生は除く」とわざわざことわってありました。その時は参加しなくていいわけです。

そのあとは、昭和十二年に黒崎さん丸茂さんという二人の女子が入ってきました。丸茂さんは在学中に亡くなりました。私は入学してすぐ、大阪の住吉あたりにいたんですが、大学の帰途電車から降りる時咯血しました。その年は七里ヶ浜の療養所へ入りました。たいしたことはなかったんですが非常に咯血が多い。そのころは結核ばやりでした。今とちがって死ぬ人が多かったのです。療養所でめきめきよくなって、レントゲンにもあまり出なかった。静岡では何回か咯血しました。その後から無理のできない習慣ができてしまっただけです。その後も十年毎ぐらいに小さな咯血があるんです。

それは、(阪大に)入ってすぐのときでした。環境がかわって順応しきれなかったんです。学校の方は何ということはないです。入ったばかりですから楽しいですね。もっとも講義はむずかかったけどね。講義をきくわけですよ、ほとんど準備せずにね。教科書はないし参考書は原書しかないですね。それでそれを(講義前に)勉強しとかないとわからないですね。わからないということは(先生が)みんな有名な人ばかりだからそんなものだと友達もみんなそう思っていました。そんな具合だから勉強が大変だということではなかったんですが、結局環境が、その前は奈良にいてその前は福島にいて、空気のいいところにゆうゆうといたでしょ。当時でも大阪は空気が悪かったでしょう。また住吉なんかなどに宿をとったので電車にかなりのっていかなければ

ならないでしょう。それで一年休んで四月からやり直したのです。もどってきたら、南雲先生が「君、阪大は北にあるのだから、そんな南の方に宿をとったらだめだよ、だからわるいんだ」といわれて笑われました。それからあとは阪神間に部屋をみつけていました。

何しろ教授もはじめてだし、若いし、教授をすること自体がはじめてなので、「先生」なんて言われるのをいやがって正田先生でも「僕、先生てよばれるのはいやだから、みな、さんづけでいいよ」というから、みな、「さん」づけでした。正田先生は三十歳ぐらいでした。教室主任は清水先生だったですね。清水辰次郎先生。あの人がすこし年は正田先生より上でした。正田先生、清水先生、南雲先生、寺阪先生でしょ。寺阪先生も大学を出てすぐ、阪大へ行くことがきまっています、ドイツ留学ですね。留学して私たちが入った年、日本へ帰っていらっしやう。だから先生方は先生をはじめとした人ばかりなんです。清水先生だって東大を出て、図書室におられて、それから阪大に主任教授でいきなりいらっしやう。

その四人が口答試問をして、宿をどうするとか、君、奈良なんだからこのへんは地盤なんだろうとかね。大学を出ても行くところはないとか。入れることはもうきめてあったらしい。学科試験だって何しろ受けた人数が数学、物理、化学合わせて四五人、そのうち数学科はちよつとですから、答案だつてすこしなんで、すぐわかるんです。

三 女子の待遇

—そのあと三年で大学を卒業されて、大学に残られたのですね。

そうですね。大学院という形で二年、そのころは修士とかそういうことはなく、大学院つまり男の人でいえば、あとで学位をとるのに便利だとききましたが、それも本人次第ですよ。あとは無給副手。

—研究ができるということですか？

そうですね。大学院だと学生ですから授業料を払うんですが副手になると払わなくてよくなる。数学の仕事は他人に手伝ってもらうことはないから副手でも大学院でも内容的には変わったことはありません。ガスピルに学士クラブがあったんです。先生方は碁を打ちにいったり、玉突にいったりしょっちゅう行くんですよ。卒業式がすんで、もう卒業して資格ができたからいいだろう、いこういこうとクラスメ



昭和14年2月26日の数学科卒業送別会

中列左の方の女性が中野さん、後列の背広の人が、左より山内省三、坂田良次、三村征雄、浅野啓三、角谷静夫、吉田耕作、小松醇郎の各先生、前列中央が清水辰次郎先生。

ートの男の子達と一緒に帰ったんです。そしたら、その頃は週日は、日曜日以外は女子は、はいれないんです。小松醇郎先生が、しょっちゅう行ってたんですが、その時私を見つ

けて（学士クラブの）中から出てきて、いいんだよとその時だけはいれ
てくれたんです、みんなといっしょに。そしたらしばらくして夏休み、
阪大から問合せがきて、大学当局から、学士会に入りたいかどうか。
入っていないと本人の資格として出入りできない。同伴で女の人を連
れてくるのは日曜日だけ、それで入りたいかと問合せがきたことを覚
えています。休みで家に帰っているときでした。教授会で問題になっ
たらいいですね、女子だから。男の先生ばかりだから、同伴者なら
いいと。そんなことはじめての経験だから、時々変なことが起こり
ましたよ。それで、いいよそんなもん入らんでもっていうことで入ら
なかったんです。だからそのあと、食事なんかでも、ふつうの食堂し
かないでしょ、学士クラブに入らないから。それで寺阪先生が、「いく
ら大学ばかり女子に開放しても世間が開放しないから食事もできな
い」っておこっけていらしたのを覚えています。

—大学におられたのは何年までですか。

終戦後までです。戦争中に数学教室が彦根に疎開しました。それで
図書を管理しなければならなくなった。彦根高商を借りましてね。そ
して図書を持込んで、それが最初で、彦根も危いということで豊郷とよさと
つとところの小学校の図書館が全部金属で、棚やなんかもね。金持です
から。それでそこの方が安全だということで再疎開しました。くると
きは大したことはなかったんです。正田先生が日清製粉ですから見事
な木箱を山のように調達して下さって、学生も大勢いましたから運ぶ
方はよかったです。それでとにかく豊郷に運んで、向うにいるとき
は大したことなかったんです。それで戦後こっちへ帰ってくるときは

もう先生方は大学のあとしまつの方が大変で大阪の方が大変だからあ
とたのむっていうことで、荷造は学生も手伝ってくれたけど、汽車が
動かない。私が彦根にのこって毎日のように駅に交渉して、もちろん
引受けるという話はあるのですが、汽車が動かないんです。そ
れでやっと大学へ運んだわけです。

寺阪先生が書物に熱心な方でした。数学は本だけだからって。こん
どそれを書棚に整理する仕事も手伝わされて、けっきょく図書の係を
やらされて、一年ぐらいはやったのかな、二年かな。それは戦後にな
ってからです。でも図書の番人では興味ないし、いろいろな人間関係も
あってやめたんです。新制になる前、昭和二十三年にやめたんです。
だいたい生活に対するそういう感覚がないものでやめちゃった。数学
教室にいると物理の人がきて、よくいってましたよ。「数学の連中
はいったい何してんだ、あれは、かすみ食って生きてんだ」って。だ
からかすみ食って生きていく修練だけはできているので、貧乏は苦に
ならない方なの。もっとも正田先生だけは別ですがね。「僕月給袋を
こん中へ入れといたけど」ってへやにオーバーをかけてあった中から
ずっと前にもらった月給袋が出てきたりしたことがあります。そう
いうご身分なんです。あの人は特別、あの人だけだったでしょう。

—阪大にそのまま残っておられたら女子の教授が生まれていたかも
しれませんね。

いえ、阪大はそうはいかないわ。数学の業績がないと。阪大をやめ
るときに、正田先生が「中野さん奈良へいかないか」っていう話はあ
ったんです。奈良の教授にね。その時、岡潔がいましたね。あの人は

こわいし何となく気がすまなくておことわりしました。それで阪大を離れました。

—どうもありがとうございます。

昭和十年に中野さんが女子としてはじめて阪大に入学のあと、戦前の女子学生は、理学部に昭和十二年二人、十五年一人、十六年一人が入学し、資料によるといずれも卒業していることが確認される（『大阪帝国大学一覽』『大阪大学二十五年度誌』『大阪大学理学部数学教室同窓会名簿』）。戦後すぐには、本誌掲載の座談会「赤堀四郎先生を囲んで」に書かれているように、昭和二十一年に三人（理学部二人、医学部一人）『大阪大学二十五年度誌』が入学しており、昭和二十三年に文科系学部の設置、昭和二十四年に新制施行により、少しずつ増えていき、現在九、五七四名の学生のうち、女子は一、〇〇六名（昭和五十八年九月一日現在）である。

最も早くから女子入学を許可していた東北帝大の事情は『東北大学五十年史』にくわしいので参考として次にあげる。また、阪大より先に九州帝大が女子を受け入れていたことが『九州大学五十年史 通史』（二一九～二二三ページ）により明らかにされている。

〔参考〕「女子の大学入学について」

大正二年五月、沢柳より総長の任をうけついで北条が、まず行うべきは九月入学の第三回生募集の仕事であった。その第三回生応募者の中には五人の女子があった。帝国大学に女子を入学せしめた前例はなく、世論また守旧派にとつては思いもかけぬことであり、天下の視聽をあつめることとなった。すでに沢柳において用意され発案されたところではあったが、北条の当面した最初の大仕事である。

大正二年八月、理科大学第三回の入学生のうちには、数学科 牧田らく、

化学科 黒田ちか、化学科 丹下むめ、の三女性がある。男子の志願者ともに入學試験をうけ、成績も良好で、八月十六日の官報に合格を公表せられたものである。このときにあたり、八月十六日東京朝日新聞は「三女史大学に入る」と題して大きくこのことを報じ、さらに八月二十二日これを追うように文部省当局者の意見をたたき、「女子と学士号、文部当局談」をかかげた。「三女史」大学に入ることには驚嘆すべき事件であつたらしく、三人の経歴や年令までを詳細に報じている。

牧田、黒田の二人はともに女子高等師範学校の卒業生で、当時は母校の助教であり、丹下は日本女子大学の卒業生でその助教であった。当時高級諸学校が増加したとはいえ、女子の高等教育機関はこの女高師（お茶の水）と目白の女子大学校がおもなものであり、正式に専門学校令によるものはほとんどなかった。すでに彼女等は女子の教育者として当時最高の地位にあつたのである。

黒田ちかの話によると、東北理科大学が門戸を大幅に開放するという風評があつたところ、東京医科大学の教授で女高師にも関係のあつた理学博士薬学博士長井長義が、彼女らに実際にそのことを告げ、かつ仙台への遊学を勧めましたので、その志が動いたのだそうである。

これらの女性が卒業した女高師や女子大は、東北理科大学入学が指定した専門学校でないので、高等学校大学予科卒業生と同等とはみなされず、資格は中等教員免許状所有者の点にのみあつた。そこで試験はまず「語学」が課せられ、それに成功した後、他の指定専門学校卒業の志願者とともに競争試験をうけた。その結果受験した四人の女子のうち三人が合格したのである。時に男子合格者三十五名だから、その一割近い入学生が女子から出たのである。（しかし女子教育一般はまだ極めて低いので、この後相当長期にわたつて女子の入学生はとだえている。）

この報をうけて文部省当局は事の重大さにおどろき、女の学士が生れる結

果についてとまどったようである。決してころよくは思っていなかった。八月二十二日の東京朝日新聞には、つぎの記事がある。

女子と学士号 文部当局者談

今回東北理科大学の女子本科入学に関しては、沢柳氏が東北帝国大学総長たりし時、前記女史等入学の下話あり。当時は語学位を試験し、聴講生として入学せしむべき考えなりしが、現総長に至り一般入学試験を課せし処、成績も頗る良好なりし為め、正科に入学を許可する事となし、本人に對して及第、入学許可の旨を官報に公表せり。

現行帝国大学令には女子の入学を否認する明文なきも、習慣上不文律により入学者は男子のみなり。一旦かく東北大学がこの不文律を破れば、他の大学は勿論、各専門学校にも又、女子の入学を許可せざるべからざるの止むなきに至るべきも、本問題の解決に就ては目下審議中に属せり。彼の三女史に対しては卒業後理学士の称号を与うるや否や、今回のみを除外例となすべきか、はた又大学令の改正を行いて明らかに女子の入学をも許可すべきか、要するに将来に関する重大問題にして、今日の処何れとも決定しおらず。

当時における一大英断で、当局はじめ天下の耳目をおどろかしたことがよく分る。当時は専門学校級でさえ女子の入学を許すのは、わずかに私立の一、二校だけであり、官立学校では女高師だけというのに、それを「帝国大学」がゆるし、「学士」ともしようというのであるから、ゆゆしき一事件であったのは当然で、文部当局者が除外例としようかと苦慮したのは無理もない。

この談によると、沢柳総長が女子聴講生を考え、北条総長が正科入学を許したらしく受けとられるが、実はそうではなかったようである。門戸開放を最初に計画した沢柳総長において、すでに正科採用の意図あり、北条総長はそれを実行したというのが実状らしい。それはやはり東京朝日新聞がその前年の大正元年十一月四日にかかげた記事によって推察されるのである。それは

「東北大学に女子を入学させる」という沢柳総長の談で、上京中の沢柳東北大学総長が、日本の女子教育について次のように語った、と記している。(摘要)

日本の女子高等教育機関の少いことを非難するものがあるけれども、これは大間違いで、元来高等教育といふものは専門教育で、高等の學術技芸を授くるの職業教育なる故に、女子が男子と同様にこれを受くべきは全く同様である。最近来日したエリオットの意見もまたその通りである。女子にして結婚生活に入らんとするものには不要であらうが、自活の必要あるものには男子と同様に高等教育——職業教育を受けるのはまことによろしい。

もともと帝国大学の制では女子を収容することが出来ることとなつてゐる。そこで理科大学の東北に明年一人化学をやるうという人があるので、これは試験を課した上で、正科に入れようと思つてゐる。

このような記事がすでに掲載されているのである。すでに沢柳総長が大正元年のうちに女子を正科に入学せしめようとする意見をもつていたことは明らかである。ここに沢柳が高等教育とはすなわち専門教育にして、これすなわち職業教育なりといつてゐること、それだから女子については結婚生活に入るべきものには必要なく、独身自活の人に必要なのだといつてゐることは、当時の時代思想を物語る。

(『東北大学五十年史 上』九〇〜九三ページより)